国際耕種と私・財津吉壽<その3>

国際耕種の将来とは

1989 年に国際耕種に入って 30 年以上 が過ぎ た。大沼が始めた AAI に加わり、国際水産技術開 発の事務所の一角で、一つの机を共有しながら二 人で動かし始めた国際耕種も、現在は 12 名とい う大所帯で動いている。その間、有機農業を目指 し農業者になるために去った仲間もいる。私もす でに AAI を出て田舎で生業を見つけようとしてい るが、ここ数年で AAI は大きな変革の時期を迎え ようとしている。つくば業務を支えてきた長谷川 が今年退職し、AAI を主導してきた大沼、湖東も そろそろ引き時を迎えようとしている。

AAI は個人事業主の集まり的存在であり、組織 を良い意味で利用しながら業務を行ってきたこと で、コンサルタント業界で認識されるように成長 してきたと思っている。個々の専門的技術・知識 はできるだけ共有しながら相互に成長させ、また 我々にない技術も誰かが引っ張りながら、大学・ 研究機関・同業他社の知人に教えを請いながら能 力向上に努めた。そして、得られた技術をそれぞ れの場で応用しながら、皆で意見交換し業務とし て成立させていた。「・・をやってみたい」 「・・は今後の活動に必要だ」という課題を積極 的に共有しようという意識は非常に高い組織であ る。この意識こそが AAI の重要な特徴である。皆 の自由度が担保された中で能力向上し、時には個 人で、時には集団でそれぞれの人材が自分のでき る能力を生かせる場をクリエイトし、現場活動に 取り組むのが AAI である。

私は、そのような AAI が好きであった。解決す べき課題はその時々の状況の中で判断し、ベター な方向で解決していく。よって、細かいことまで 社内規則は作らず、皆が会社の運営にかかわりな がら会社を利用してきた。知識獲得のためには会 社資金を積極的に出す。それは阿吽の相互納得の 上で行われてきた。通常の会社では到底認められ ないかもしれないが、AAI はそれができていた し、出来るように社員同士で仕事量を調整しなが ら組織運営を行っていた。それこそが AAI であ り、そのような AAI が好きであった。組織が大き くなると仕事が増えること、忙しいことを言い訳 に、対面での意思疎通がおろそかになる傾向にあ る。AAI はこのような会社になることを意識的に 嫌い、出来るだけ顔to顔での意思疎通・論議を行 えるように、社内にたまり場を確保し、定例テレ ビ会議の場を作ってきた。将来的に社員の立ち位 置が変わり、それに伴い会社の業務戦略が変わる ことは当然ある。が、このような組織運営の意識 は継続してほしいと思っている。これまでの AAI がなぜ存在しているのかを意識した全社員経営を 継続してもらいたい

私の田舎では、開発コンサルタント業界は全く 知られていない。そして業務を話しても遠い星空 のことと思い込んでいる。通信手段が発達し、ど こにいても世界の情報が一瞬にして得られるよう になっているこの時代でも、である。海外開発コ ンサルタント業は、国内では経験できない多種多 様な人とのつながりや、自然・生活との未知の遭 遇ができる魅力的な業界である。多くの地方人も この楽しさ・魅力を感じてほしいと考えている。





最初の海外 (UAE1978)

直近業務 (スーダン 2019)

最後に今後の国際耕種を担う仲間たちへ。今後 人の出入りがあろうとも、AAIの"think globally act locally"、書生気質を忘れずに、現場それぞれ の人・自然・癖を見ながら、それぞれの地域環境 に応じた国際協力に担ってほしい。また、そのた め自己の能力向上を自由度のある体制の中で共有 していくのが AAI である。自由な生活を担保して 業務をエンジョイしてほしい、そして地方で生き る私に情報を還元するのも忘れないでね。